

< 特別寄稿 >

正山征洋先生のご厚意で所蔵されている「ボタニカルアート」の一部を紹介していただく事になりました。大変貴重で興味深く、芸術性も高い作品に加え先生自ら解説されています。

ボタニカルアート

九州大学名誉教授・長崎国際大学名誉教授

正山征洋先生

第56回

ツワブキ



キク科のツワブキです。葉に艶があることからツヤブキと呼ばれていましたが訛ってツワブキとなったと言われています。

ツワブキは本州（福井以西）、四国、九州の海岸に近い地に多く自生します。11月、12月頃に太い花柄を延ばし黄色の美しい花を開きます。春茎葉が伸びた頃採取しフキと同様食べることが出来ます。

葉を「藁吾」と呼び薬用にします。生葉を揉んで柔らかくし腫物、切り傷、虫刺され、湿疹等に用いられます。また葉を煎じたものは魚毒を制すと言われ、魚による食中毒に用いられます。

本画には斑入りが描かれています。斑入りは園芸種として植えられてきましたので、日本からヨーロッパへ持ち帰り園芸種としたものと思われます。カーチスのボタニカルマガジン1862年作です。

W. Fitch, del. et lith.

Vincent Brooks, Imp.